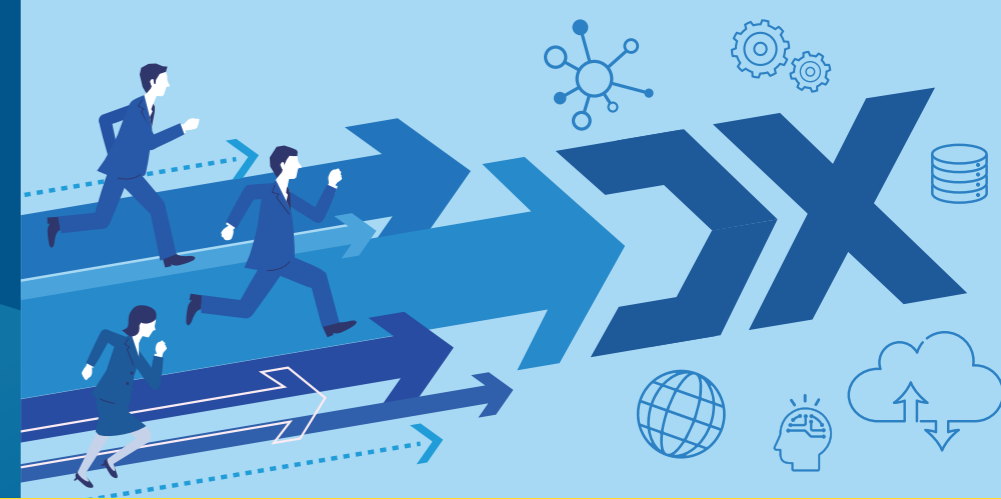


今こそ知りたいDX/
vol.1

DX実現までは長い道のりです。私たちがお客様のDX実現に寄り添い続けます！

「DX」って何？ どこから始めるの？

「DX」という単語を耳にしない日はないですよね。また日常の会話や、ビジネスコミュニケーションでも多用されています。営業DX、財務・経理DX、製造DX、医療DX、行政DX……。業種や業務に「DX」という単語が付帯して、市場で氾濫しています。それでもなお、DXが理解しづらい理由は何でしょうか？ DXは特定のモノやシステム、ソリューションで解決できない、それぞれの企業の経営戦略・成長戦略・競争優位の戦略そのものだからです。そこには人や組織、文化や風土、ビジネスモデルやそのプロセス・業務、そしてデジタル技術とデジタルデータが密接に複雑に絡み合っているからです。さらに個人や企業がDXという言葉に自由に解釈、発信できてしまいます。DXは長い道のりです。DXのプロセスを正しく理解しながら、お客様自身のDX戦略とその実践に私たちは寄り添い続けます。



DXが言葉先行！

バズワード&ビッグワード！

抽象的でわかりづらい！

DXのイメージってどんなもの？

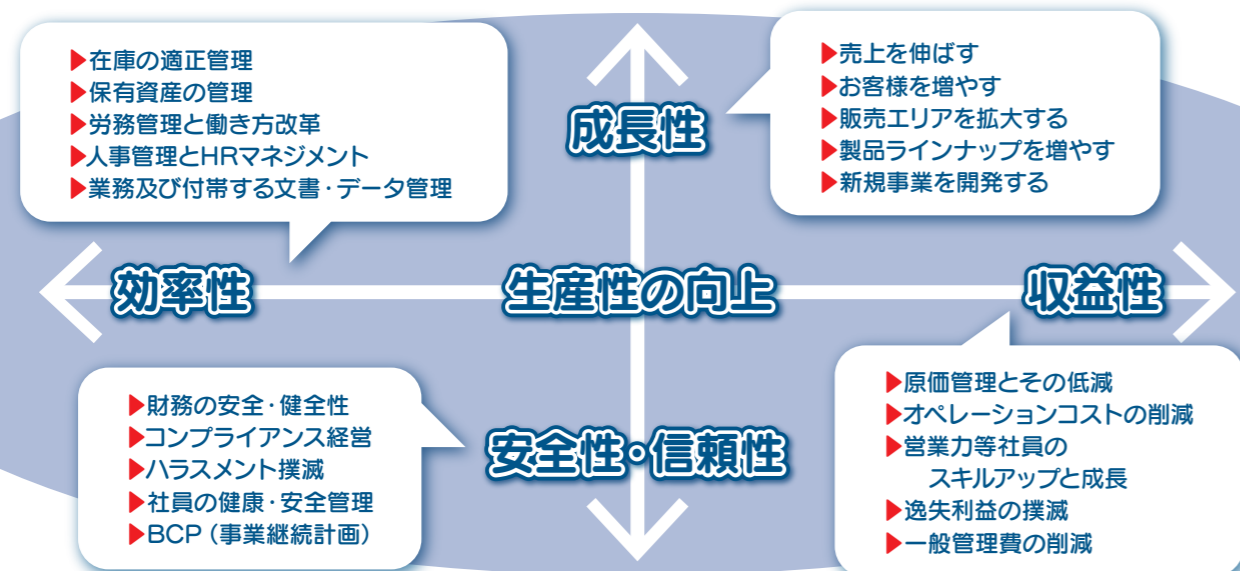
- ▶ 大企業だけのものじゃないの？ ▶ 概念的過ぎるよね
 - ▶ 業種業態ごとに取り組みが違って複雑みたいだし
 - ▶ IT化やシステム導入すればいいの？ IT化との違いもわからないなあ
 - ▶ お金がかかりそうだし、時間もかかりそう… ▶ デジタル人材が不可欠だと聞くけど…
- やはり、実体が見えず難しく、時間がかかって、わかりづらいというイメージは払拭できませんね…

それでも避けては通れません！

パソコン・スマホやインターネット、IT化の普及で今やデジタル社会に変わりつつあります。さらに世の中は、災害、パンデミック、少子高齢化による労働力不足など課題山積！ 巨大IT企業が台頭、異業種へ参入し、ビジネスの障壁がなくなっている競合ポードレス市場です。お客様の成長のためDXを進めていきましょう。

DXの定義の前に、企業の目標と成長について整理してみます。

企業の目標



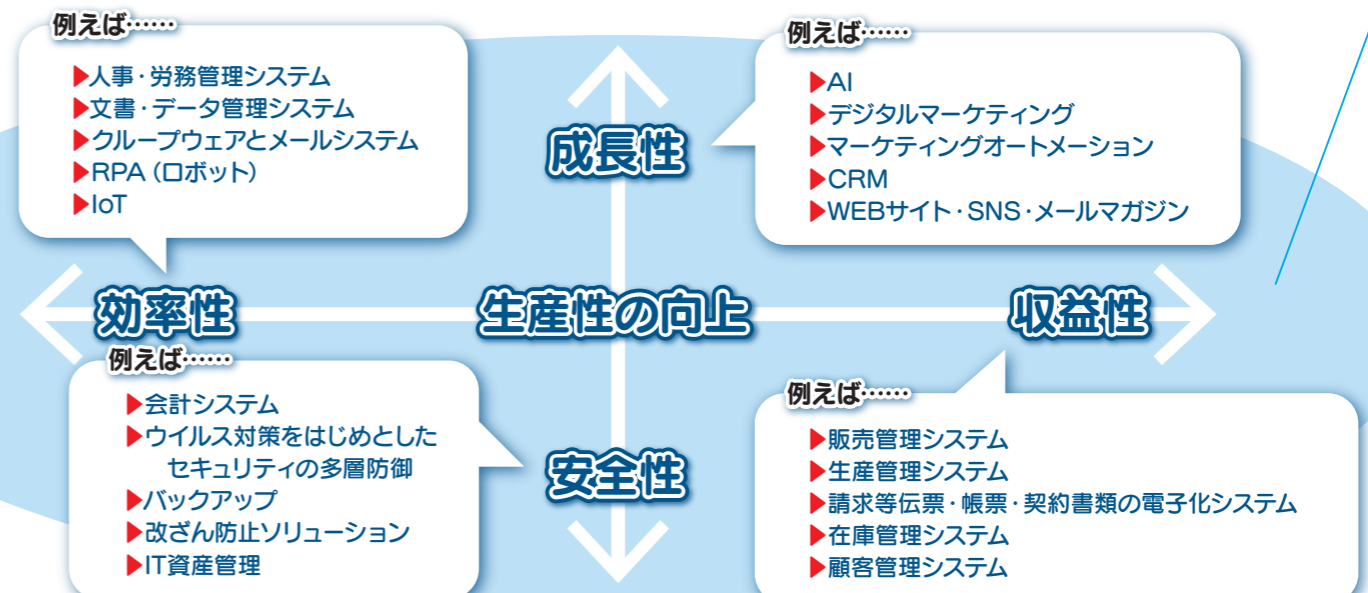
DXの定義

DXを最初に唱えたスウェーデンウメオ大学のエリック教授は「ITの浸透が人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させる」こととしています。また、経済産業省の定義では、「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」とあります。

企業の目標を達成するためにどのようなデジタル技術が使われているのか、一例をご紹介します。ただ、デジタル技術やITツールの導入がイコールDXではありません。ツールだけで解決しようとすると思わぬ落とし穴があります。

業務フローやデータの整理プロセスを中心に設計することが重要です。

企業の目標とデジタル技術の関わり



つまり、

独立しているデータとシステムをフロー化していき、成長戦略を描く！

歴史の中で企業が当たり前やってきたプロセスをデジタルに置き換えていく。結果、企業が成長し生産性を高めていくことこそがDXのプロセスなのです。ですからITシステムを導入することがイコールDXではありません。IT化、ITツールの導入を目的やGOALにしてしまう傾向が強いのですが、そこは気を付けるべき重要ポイントです。



DXの入り口！ データドリブン！

データドリブンとは？

データドリブン (Data Driven) とは、データを収集→共有→分析→してもう一度共有、その結果に基づいて意思決定をするビジネスプロセスを言います。
かつて企業活動は、経営者やマネージャーの「経験と勘と度胸 (KKD)」に基づいて意思決定されることが多くありました。しかし、人間が経験と勘を積み上げるには何年もの時間がかかります。
デジタル技術とデジタルデータを活用することにより、企業を成長させていく手法です。

難しく説明してしまいましたが、ステップとしては、アナログデータを扱いやすいデジタルデータに変換し、社内やチームで共有・活用して、組織の生産性を高めていくことです。そのプロセスにITソリューションが必要になります。

データの共有と活用によって、「効率性」が向上し、それに伴って「収益性」が向上します。集積されたデータをセキュアな環境で管理する「安全性」の担保も必要不可欠です。
「効率性」「収益性」「安全性」の向上によって、「成長性」が生まれてきます！
見積書の具体例でご説明いたします。



具体例を交えてご説明します！

Case: 見積書

パソコンやWindows、オフィスアプリケーションが普及する前は、見積書は手書きでした。今はExcel等使いやすいソフトウェアによって、アナログではなくデジタルデータとして見積書を作成することがほとんどだと思います。つまりアナログからデジタルへの変換は当たり前になっています。
しかし、見積書 (Excelデータ) が、個人所有・管理になっており、共有出来ないケースは多いのではないのでしょうか？作成や管理についての明確なルールが不在のケースも見受けられます。

個人で作成し、クライアントPCに保管している場合

- ▶ 営業担当が不在時に対応が出来ない。どのファイルが最新版なのかわからない。どこにあるかわからない。正しいのかもわからない。
- ▶ Excelの書式が個々に異なり、金額等々に誤りが生じても、個人管理のため修正や誤りを可視化できない。
- ▶ 原価管理や確保すべき利益 (利益率) が不徹底になりがち
- ▶ 同じ商品なのに顧客ごとに再見積、多少の構成の違いでも再作成の必要があり手間がかかる
- ▶ 見積データ⇄見込データ⇄売上データ⇄顧客データがそれぞれ独立しており、全体可視化やマネジメントがしにくい
- ▶ ただただひたすらにファイルが膨大に増加していく
- ▶ 安全性が担保されていないクライアントPCへの保存データは破損や消失の恐れがある
- ▶ 作成から管理まですべてが個人任せになっており、運用面もハード面もネットワーク面もセキュリティが脆弱



共有データとして管理し、組織やチームで閲覧・加工・管理等ができる場合

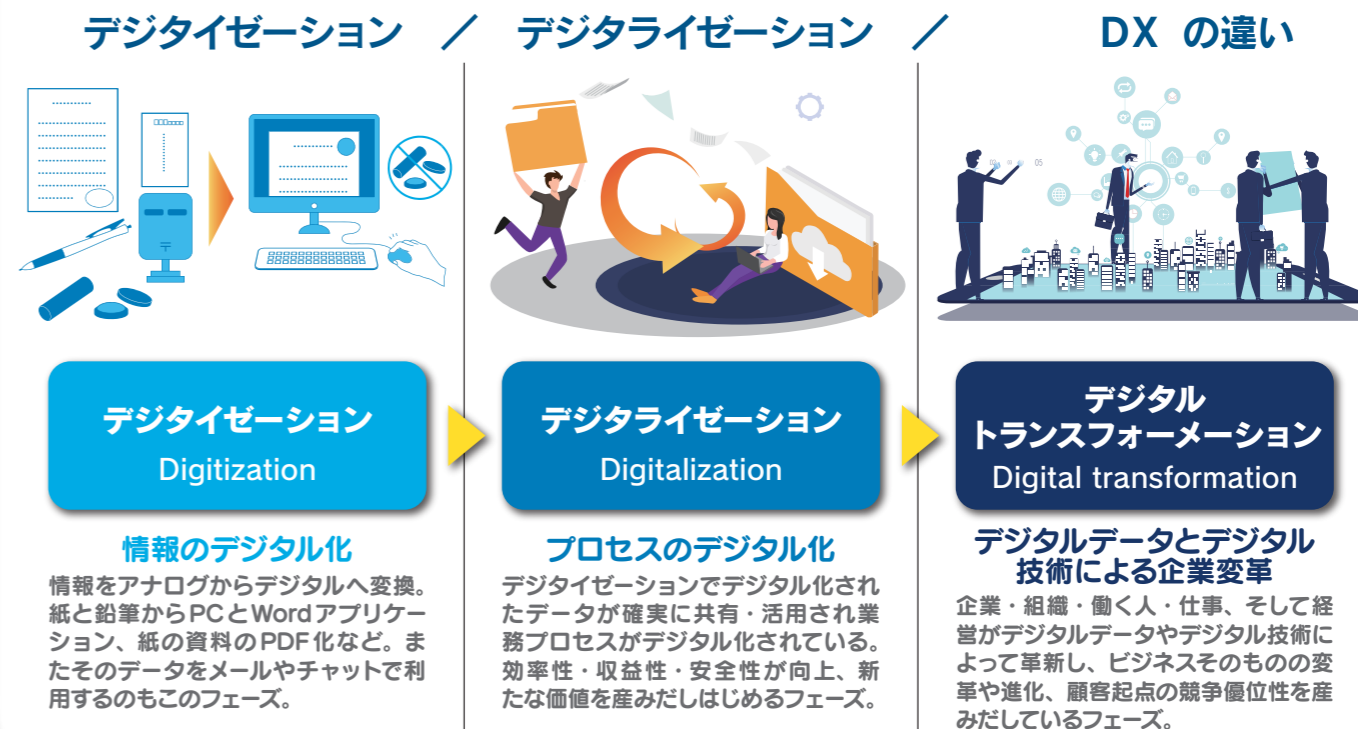
営業担当がいなくてもお客様の問い合わせに対応できるようになり、Excelの書式を統一し、類似したデータの再利用と流用ができるようになり効率性が上がります。
当然、リモートワークにも対応しやすくなり、働き方改革にも貢献します。
サーバ等にはしっかり保存し、バックアップやセキュリティ強化をすることにより、安全性が飛躍的に向上します。
月別やお客様別、個人別のフォルダ管理やアクセス管理を行うことによって、データが見やすくなり、不要なデータの整理や最新版の管理ができるようになります。つまりはデータの5Sが実践されます。
それぞれの見積データの集計プログラムを作成することにより、月次の見込集計やお客様ごとの案件管理、分析、売上データとの紐づけもやりやすくなります。
このプロセスがデータドリブンの入り口、そして基盤です。
さらに次のフェーズは、データをデジタルワークフローに乗せることです。結果、プロセスのデジタル化が見えてきます。



まず最初はデータの共有です！共有までのプロセスについてはあらためてしっかりご提案いたします！

DX実現までのフェーズ

DX (デジタルトランスフォーメーション) 実現に向けてのプロセスがあります。1st ステップがデジタイゼーション、2nd ステップがデジタライゼーションと言われています。まずはそのプロセスと違いについてご説明します。
特に今回はデジタルデータに着目してDX実現までのプロセスを整理します。



情報作成フェーズは、デジタルで作成されることが多くなっています。(デジタイゼーション) しかし、まだまだアナログデータが混在します。できる限り活用すべき情報をデジタル化することが最初のアクションになります。
次のステップはデジタルデータを共有し、組織の業務で活用できるように、業務プロセスのデジタル化 (デジタライゼーション) を行うことです。
多くのビジネスプロセスはデジタイゼーションとデジタライゼーションあたりの段階にあるようです。

まずはデジタライゼーション実現を目指しましょう。課題を少し教えてください。

- ◎ 今回の見積書の事例のように、何かのデータ (見積書に限らず) が個人で作成、分散管理されており、共有出来ないコトはありませんか？それはどんなデータなのか教えてください。
- ◎ データ共有はできているが、ワークフロー化、つまりそのデータが業務プロセスにきちんと乗っていないコト、フローの途中でアナログに戻ってしまっているコトはありませんか？どんなデータが該当するのか教えてください。
- ◎ アナログデータ (紙) で作成されたり、保管されている資料がデジタルデータ化されればもっと活用出来たり、有用になったり、効率化、売上アップにつながるコトはありませんか？どんなデータが思い当たりますか？教えてください。
- ◎ 生産性向上につながるかもしれないデジタルデータの管理が個人任せになっており「どこにあるかわからない」、「最新版がわからない」、「使えるかわからない」「そもそもそのデータがあるかわからない」といったコトありませんか？
- ◎ 「データの正確性が担保されているのか？」「改ざんされたり、漏洩したりするリスクはないのか？」「誰がアクセスできる権限があるかわからない」など、不安に感じているコトありませんか？
- ◎ 増えるばかりのデジタルデータ、保管するのに場所を取る紙データの混在は管理が大変ではありませんか？さらに同じような集計データや分析データを何度も作り直す、別々の人が同じようなデータを苦労して作成、それぞれが保有しているという重複作業、つまり、ムリ・ムラ・ムダなコトはありませんか？

お客様の成長のため、私たちがDX推進パートナーとなり、寄り添い続けます！
デジタイゼーションの見直しから始め、デジタライゼーションへのステップアップをご提案させていただきます！

